

1 部局名

大学教育センター

2 学長指定課題

アクティブ・ラーニング手法の学内への波及

3 事業名

「実際に活用できる」アクティブ・ラーニング手法紹介セミナーシリーズの開催とアーカイブ化

4 事業実施代表者名

大学教育センター 教授 松田 岳士

5 事業の概要

大学教育センターに置かれているFD部門は、ファカルティ・ディベロップメントの推進及び教育改善の取組の支援に関する業務を担っている。大学教育センター長が委員長を務める全学FD委員会では、FD活動の一環として、FD・SDセミナー、FDセミナー等の各種セミナーを毎年定期的に開催している。これらは、年間のFDテーマに基づいた大規模なイベントとして実施されており、当該年度のFDテーマに関する基本的な考え方や教育改善のトレンドを周知する効果をあげている。一方で、参加者に具体的なスキルや実践方法を習得させる性質のものではないため、参加者からは、実際に自らの授業改善に直接役立つ技法を習得したいとの要望が寄せられていた。

本事業はこのような課題を解決すると同時に、学内ニーズ反映と本学の教育質保証を両立するFD実現のために実施するものである。具体的には、教育改革の基本方針となる「本学の教育改革-教育の質的転換に向けて-」及び第三期中期計画で示された、「アクティブ・ラーニングの推進」を達成するための施策として、アクティブ・ラーニングの手法等を紹介する「アクティブ・ラーニングセミナー」を開催し、その内容をビデオコンテンツとして学内公開することにより、学生に考えさせる仕組みの導入および授業改善をサポートする。

6 取組成果

1. 成果

(1) 幅広いテーマ・参加者

3年間13回のセミナーでは、アクティブ・ラーニング自体に関する総論、ループリック、反転授業、グループ学習、双方向性を確保した大人数授業、eラーニングなど幅広いテーマでワークショップを実施した。全学部からのべ172名(1回平均13.2名)が参加し、学長、学部長から非常勤講師まで様々なキャリアの教員の参加を得ることができた。また、13回のセミナーのうち、5回が学外講師、7回が本学大学教育センター教員、1回が本学健康福祉学部教員の担当であり、学内外の事例やノウハウが紹介された。

(2) 参加者からの高い評価

参加者に対するアンケートを(各セミナーの終了時に)実施したところ、満足度についても、セミナーで紹介された手法を取り入れる意欲についても高い評価となった。例えば、満足度は2017年度の第3回を除いてすべて(5段階で)4を超えていたし、セミナーで紹介された手法を取り入れようと思うとの回答も2018年度の第2回以外4以上であった。これらは参加時にアクティブ・ラーニングを

実施済みであるかどうかにかかわらず同様に高かったので、参加者の幅広いニーズに沿った内容が提供できたと考えられる。

2017～2019年度（第1～13回）のセミナー概要

回	実施日	場所	タイトル	人数	満足度	取入意欲
1	2017年7月20日	南 大 沢	90分でポイントを押さえる！ アクティブ・ラーニングの導入背景と具体的実践法	14	4.31	4.23
2	9月21日		初年次教育こそアクティブ・ラーニングで！	11	4.09	—
3	11月1日		専門教育におけるアクティブ・ラーニング —ゼミ以外でのAL導入チャレンジ事例—	7	3.83	4.00
4	2018年1月23日		ループリック評価の基礎	12	4.36	4.64
5	3月19日		—実例から読み解く作成法—	11	4.70	4.50
6	5月23日		反転授業を始めてみよう！	18	4.19	4.20
7	9月20日	日 野	効果的な授業設計方法を学ぼう —インストラクショナルデザインの基礎—	15	4.07	3.73
8	10月4日	荒川	反転授業を体験してみよう	13	4.88	4.56
9	12月14日	南 大 沢	なぜグループディスカッションか？ —グループディスカッションを取り入れた授業デザイン—	12	4.50	4.42
10	2019年3月5日		大人数授業でも無理なく双方向性を向上させる授業設計	19	4.18	4.41
11	5月23日		eラーニング教材作成・活用入門—配付資料・小テストからビデオまで—	18	4.47	4.33
12	10月3日	荒川	ループリックの活用事例を学ぼう！	16	4.60	4.50
13	12月20日	南 大 沢	汎用的能力をどのように 育成・評価するか —アクティブ・ラーニングの役割再考—	6	4.33	4.67

（3）参加者の教育手法への影響

2019年度に行った第12回までの参加者対象調査で回答のあった32名のうち、25名（78%）がセミナーの成果を自分の授業改善に活用したと回答した。その内訳（複数回答可）をみると、「本セミナーで紹介された手法を新たに授業に取り入れた」と答えたのは9名であり、その内容は予習用の動画作成配信（2名）、ループリックの使用、kibacoの活用などであった。また、「本セミナーで紹介された手法を参考にして、すでに実施していた教育手法をさらに工夫した」と回答したのは14名（うち最多はループリックの改善で7名）、「本セミナーと他のFDセミナーで学んだことを合わせて参考にして授業を改善した」のは4名であった。

これら以外に、「セミナーをきっかけに、新たな手法を自ら調べて活用した」（3名）、「kibacoで本セミナーのビデオコンテンツを見たことがある」（9名）などの回答もあり、直接影響を与えていない場合にも、本セミナーが何らかの形で授業改善につながっていることがうかがえた。

(4) デジタルコンテンツの開発・公開

本取組を通じて、合計 51 本のビデオ（セミナー自体のビデオ 42 本、ビデオ教材の作成法 3 本、TA/STA 活用 6 本）、対面のセミナーにおける配布資料や上映資料などが今後も利用可能なコンテンツとして制作され、kibaco 経由で全教員に公開されている。

2. 課題

おおむね予定通り実施された本取組であるが、以下のような課題が残された。

(1) デジタルコンテンツのさらなる活用方法

上記のように本取組を通じてオンデマンドビデオコンテンツを中心とした多様なコンテンツが利用可能になっている。しかし、2019 年度末において、これらに対するアクセス数が順調に伸びているとは言えず、また、組織的な活用方針が示されているわけではない。これらコンテンツを将来的にどのように活用していくのかについて、FD 委員会、各学部・学科、大学教育センターなどにおいて議論し、有意義に用いる方法を開発すべきである。

(2) 中・長期的効果の検証

セミナーのうち反転授業やルーブリックに関するものは、授業全体の設計や評価の変更につながる内容を含んでいる。それらのセミナーは受講翌年度以降に成果が表れると考えられる。2019 年度に行った過去の受講者調査でも、セミナーの成果が授業改善につながっていない理由として「今年度の評価指標は既に学生に公開しているため、来年度以降検討したい」、「現在の講義では利用できないため」というものがあり、成果を中・長期的に確認していくことは有益である。

(3) 未実施のセミナー

最終年度（2019 年度）に新型コロナウイルスによる感染症拡大を受けて、最終回（第 4 回）セミナーは中止となった。本事業による助成期間は終了したが、2020 年度に大規模に行われている遠隔授業の効果を保証するには、学生の自律性がより必要になるので、学生の主体的な学びをテーマとした最終回のセミナーは重要である。